

エペソ人への手紙 1 : 19 (パウロ)

Preface

これまで使徒パウロの祈りから、神様がどのような望みと期待を持って私たちを召し出したのかということと、聖徒たちが受け突くものがどれほど栄光に富んだものであるのかについて考えて参りました。

今朝は、3つ目の項目、「神の大能の力の働きによって、私たち信じる者に働く神の優れた力が、どれほど偉大なものであるかを知ることが出来るように」ということについて考えていきたいと思えます。

ここまでパウロの祈りを見てきましたように、彼の祈りは「何かをください、何か能力を、結果をください」というものではなく、「知れるようにしてください、知ってしかるべきことを知ることが出来るように、悟る必要のあることを悟ることが出来るようにしてください」という祈りでした。

こう祈りが出てくる理由、この祈りの前提としてあるのが、「与えられるべき大切なものは、もうすでに与えられている」ということです。

私たちが主から与えられるものの中には、ここまで見たきましたように、これから与えられるもの、将来・未来的なものもありますが、私たちが考えるよりはるかに多くの部分においてもうすでに成就しており、「その成就していることを悟らせてください」と、パウロが祈っていることに注目する必要があります。

祈りと言った時、一般的に私たちが考えるのは、まだ弱く、まだ力も能力も財も無く足りていないから、それを満たしてくださる方法、方策として祈りを捉えてしまいがちですが、パウロの祈りから私たちが教えられ、考えを改めさせていただくのは、「祈りとは知ることである」ということです。

色々な面で足りていないと思う私たちの思いに応えてくださることも、もちろん祈りの一面であります。

そのような祈りが聖書の中に出てくることも事実ですし、実際私たちも経験します。

ですが、私たちの願いを叶えていただくための方法や方策が祈りの本質ではなく、それ以上に、それを遥かに越えて、もうすでに神様の大能の力をもって成し遂げてくださったものが私たちの内に力強く働いているという事実、もうす

でに完了しているということについて知れるようにと願うことをもって、パウロは祈りとしています。

何かこれから将来与えられることのために祈るのではなく、過去のために、過去にもうすでに私たちの身に起こっている重大なこと、またはすでに与えられているものの偉大さを知れるようにと、パウロが祈っていることを私たちは見逃してはならないと思います。

### Part One

信仰という言葉が聖書がどれだけ注意深く用いているかと言いますと、「これぐらいあなたのことを信じてあげるから、こういう結果をください」という提示した条件に、望む結果を獲得するための賭けや博打のようなものとして信仰という言葉を用いたりせず、信じるに値する証拠がもうすでに十分にあるから、信じられることを、信じられてしまうことを信仰と聖書は言っています。

よく私たちが使う表現の中で、「とりあえずまず、信じてみて。そうしたら分かるから」というものかもしれませんが、どうやってとりあえず、先ず信じる事が出来ますか？

不確かだけれども、自分に言い聞かせるかのように信じて財を投じる賭け事ならば、そうしないと成立しませんが、聖書が私たちに教えてくれる信仰とは、不確かなものに身を投じる賭け事や博打ではありません。

これはちょっといけないことですが、高校生の頃少し遊んだことがありまして、高校2年生の頃一時期パチンコにハマっていたことがありました。

で、上野のパチンコ屋さんに、親からもらった友達とスキーに行くためのお金をもって、開店前から血眼になって並んでいたことがあります。

その時の思いは、「このパチンコ台には何かを感じる。だからこの台に賭けたい。そうすれば、きっとこの思いが届いて大当たりをくれるだろう」という願掛けのような思いで台を信じて、望む結果を得ようとお金を掛けました。

結果は大当たりでしたけれども、キリスト教信仰は、こういう賭け事のような不確かなものに身を投じるようなことではありません。

「ああ、これは確実だ」という証拠と降伏降参に値するものが十分にあることを経験させてから、分からせてから、要求されるものです。

つまり、私たちの思いが先行することが信仰ではなく、神様が十分に見せて下さり、与えてくださり、経験させてくださったから、「だから、信じなさい」というのがキリスト教信仰です。

キリスト教は、「信じたら、こうしてあげる」というような宗教ではありません。

もっと言いますと、クリスチャンは説得によってなるものではなく、クリスチャンとされたから共感するんです。

説得したから信じるのではなく、信じられるようになったから、悟らされてしまったから、共感しちゃうんです。

神様について、イエス様について、キリスト教についてのことに共感できるようになってしまうのが、信仰ですね。

キリスト教は人間から始まった宗教ではなく、唯一まことの神様が先に、私たちのために起こしてくださった宗教です。

こういう面で、所謂世で言う人間の作り出した宗教とは、一線を画します。

聖書は福音を、私たちの願いを叶えるための方法とか方策とか言った試しは一度もありません。

また、何かを悟ったならば、何かをやったならばとも言わずに、いつも先に与えた、先に施したと言います。

## Part Two

### ローマ人への手紙 1 : 16 (パウロ)

福音は神の力です。

神様が私たちを救いに与らせ、信仰を与えるための神様側の方法であって、私たち側の願いを叶えるための方法や方策ではありません。

だからある意味、福音は分かりにくくて当然なんです。

福音がもし私たちに分かりやすいものならば、みんなクリスチャンですね。

でも、そうではありません。

なぜか？

神様側の方法であり、流儀であるからです。

イエス様のお語りになった完璧な福音でさえ、人々は理解出来ずに反発して、イエス様を十字架に架けてしまいました。

イエス様でさえそうであるならば、どんなに私たちが分かりやすい理解しやすいと考える方法や語り口や内容で伝えたとしても、分からない時は分からない。

逆にどんなにみすぼらしくて、足りなくて、低俗で、頭の中が攣りそうなほどに分かりにくい難解な言葉で伝えたとしても、分かる時には分かるんです。

(ジョナサン・エドワーズの話 なぜそういうことが起こるのか?)

なぜならば、福音は、神様が与え、神様が施し、神様が分からせ、神様が悟らせてくださる神の力だからですね。

だから祈るんです。

「どうか、このどうしようもない者が伝える御言葉が用いられて、何とか一人

でも多くの方々に、福音が届き、イエス様のことを知れるようになりますように」と、神様の力を信じて祈るんです。

ですが、いつもここで問題になるのが、福音とは神の力であるにもかかわらず、「これを、あれを、それをやっただきしたら、あなたが神様であることを信じます」という風に、私たち側が望む条件を付けて、神様を試そうとすることをもって信仰だと思ってしまうところです。

もう20年ぐらい前になるとと思いますが、池袋のビックカメラに妻と一緒に腰痛に効くという金魚運動器を買いに行った時のことです。

腰痛がひどくて、藁にも縋る思いで買いに行ったのですが、ビックカメラの大型店舗の真正面に「100人に1人タダキャンペーン」という大きなバナーが掲げられていました。

10万円を上限に、会計時、100人に1人の買い物料金が無料になると言うんです。

そのバナー広告を見て、「あれ、俺に当たったら神様本当にいるからね」って言ったところ、家内に「そんな神様に無礼な、不信仰なこと言っちゃダメ！」と怒られたんですが、これが本当に当たったんです。

で私が、「ほら、言ったじゃん！ もっと高いもの買っときゃ良かったんだよ！」って言いました。

これから起こることに条件を付けて、その条件を満たして頂くことを福音だと思いこみ、神様を試そうとする私の低レベルな信仰に、神様はそんな私を哀れんでこの時は合わせてくださいましたが、いつまでもそんな祈りもどきのような、信仰もどきのような責任や使命も伴わないようことを求めながら、信仰者だと言ってはいられないですね。

苦い薬を直接飲めない子供たちが薬を飲みやすいように、糖衣錠という薬の外側を甘いもので包んだ薬をご存知だと思いますが、その甘いものの中には薬が入っていない薬にはなりません。

舐めても舐めてもどこまでも甘いものならば、それは薬ではなく、虫歯にしてしまうかもしれない飴玉です。

イエス・キリストを信じるための入り口として、消えてなくなる一時的な喜びや物事思い通りに行くことを用いて、神様がいらっしゃることを教えてくださいますが、それが全てでもなければ終わりでもありません。

また核心でもなければ、それが祈りや信仰の真の内容ではないですね。

なので、いつまでも、「神様は飴玉を下さらない、飴玉を下さらない」とつぶやきながら、熱心に祈ることをもって祈りだとか、信仰だとか、私たち言うてはいられません。

### Part Three

使徒パウロが私たちに教えてくれる祈りや信仰は、知ることです。

神様が私たちに召し出しもてなすために一体全体何をしてくださったのか、また、そのしてくださったことの偉大さと、それがもうすでに私たちの内に働いていることを知ること、これが祈りであり、信仰ですね。

神様が愛しておられるということが一体全体何なのか、神様がすでに、どれだけのものを支払ったのか、投じたのか、投げ打ったのかを知るのです。

それを知れば知るほどに、私たちは、どんな状況の中でも堂々としていられます。

「神様がこんなにも愛してくださっているんだ！ 神様がこんなにも多くのものを施して下さっているんだ！ 神様はもはや私たちを今後一切、放棄されることはないんだ！」ということを知ること、これが信仰であり、祈りです。

では、私たちが私たちの信仰を確固たるものとし、神様を信じることの出来る最も確実な証拠が何なのかと問うた時、聖書はいつも何と云うのでしょうか？

その問いの答えとしていつも聖書に登場してくるのが、十字架です。

問うた時、問われた時ごとに出てくるのが「十字架を見なさい」です。

神様のひとり子であられるイエス・キリストを私たちのために、私たちがまだ罪人であった時、捜したこともなく求めたこともない時に、イエス様を、父なる神様は十字架に架け死なせなさいました。

到底値段なんかつけることの出来ない血をお流しになりました。

ここに私たちは、見えない神のかたちであられ、すべてをお造りになった神であられるイエス・キリスト自ら、私たちがどのように召し出し、どのようにもてなしておられるのかを見ることが出来ます。

神様は私たちを生かすために、イエス・キリストを十字架に架けて殺すことはあっても、私たちを見捨てることはないということを見ます。

このことが、なぜ私たちにとって重要なのかと言いますと、私たちの信仰は揺るぐ時があるからです。

神様がいるのか、いないのか、もっと言いますと、神様が私の味方なのか、味方じゃないのか、私のことを本当に愛しておられるのか、愛しておられないのかという信仰の試みを受けます。

私たち人は、何か間違ったことをした時、「私が悪うございました。神様申し訳ありませんでした」と素直に自分の過ちを認める前に、「なんでこのことで、私が叱られ、こんな目に合わなくちゃいけないんだ！ あの人たちはもっと意地悪だし、悪いことしているのに、何で私がこんな目に合わなくちゃいけないんだ」と、とりあえず一回憤りながら、神様か、誰かしらに言いがかりをつけます。

間違っただけをしたからには、素直に認めて「ごめんなさい」と悔い改めればいいものを、その責任を全うしようとせず、「もしかして神様、私を見捨てたんじゃないだろうか？」と、心の内でとんでもないところに飛躍させます。

自分の間違いを認めたくないことゆえに、「神様、あなたは何でこんなことを私になさるのですか？」と、勝手に神様を敵にして、神様が私の味方でないかのように思うてしまうことがあります。本当はそんなことする必要はないですね。

なぜならば、神様は、私たちを生かすためにイエス・キリストを十字架に架けて殺すことはあっても、私たちを見捨てることはないんですから。

### Part Three

#### ローマ人への手紙 5 : 8 (パウロ)

イエス様は誰の助けを受けることもなく、お一人で孤独に十字架で死なれました。

弟子たちも方方に散っていき、一番でしたと自負するペテロに至っては、イエス様のことを3回も否定し、呪い、知らないと言いつつ立っていました。

そういう中で、私たちをお救いになるために十字架で死なれました。

これが聖書の語る十字架であり、そこに現れる愛です。

この明らかになった愛ゆえに、私たちは、私たちの間違いを素直に認めて、赦されているという事実を知ることが出来ますし、知るだけでいいんです。

そして、それが知れるようにと祈るんです。

使徒パウロは、結局私たちに何を教えてくれているのかと言いますと、私たちの戦いは外的戦いよりも、内的戦いの方が遥かに多いということです。

「あなたがたが何か困難や苦難を経験した時、弱さや孤独、または間違いゆえの挫折、これらすべてのことを何をもって打ち勝つのかというと、それこそ信仰だけれども、その信仰はやせ我慢とか、お守りを持っていれば大丈夫とか言う何の根拠もない願掛けのようなものではなく、

神様がどんな時に先に愛してくださったのか、愛しているがために成して下さったことがどれだけ偉大なことか、どれだけ無様でどれだけ悲惨な時、至極の贈り物を、至極の力をもって、私の味方になって下さったのかを記憶しなさい」ということです。

私たちは、今後一切決して、神様の前にあって取りやめたり、取り消されたりする存在ではありません。

私たちが先に間違いを認め、先に謝れないのは、この神様の至極の大能の力よ

りも、自分のプライドや経験や知識をより大きくして、先立たせてしまうからでしょう。

旧約聖書を見ますと、神様がイスラエル民族にそのお姿を現し、語り掛け、何かを彼らに要求するすべての根拠は、「わたしは、あなたがたを奴隷であったエジプトから救い出した主なる神である。だから、わたしの言うことを聞きなさい」ということです。

「だから」と言える根拠が神様には御有りて、その根拠ゆえに、神様を信じる事が出来るんです。

「闇雲に神様を信じろ！」なんてことを神様が言った試しは、一度もありません。

しっかりとした根拠となることを施し、経験させ、その十分な根拠をもって、「わたしを信じなさい」と仰います。

## Part Four

### 申命記 4 : 32 - 40 (パワポ)

主なる神様を信じ、主なる神様の掟と命令を守る要求さえも、神様の独り善がりの身勝手な思いを達成したいからではなく、子孫を幸せにし、永久に与えようとしておられるその地で日々が長く続くようにするためであり、

しかも、主なる神様を信じ、その掟と命令を守りたいと思えるような十分な根拠まで成し遂げ、施し、与え、示してくださいました。

神様は、他の国民の中から取り、ご自分のものにされ、御声を聞かせ、ご自分の火を見せ、愛し、選び、導き出し、導き入れ、敵を追い払い、ゆずりの地を与えたという、信じるに十分過ぎるほどの根拠を働かせてくださった後に、「わたしを信じ、わたしの言葉を守りなさい」とおっしゃいました。

私たちに神様が要求しておられる信仰とは、「到底助かる見込みのないところから何の保証もなく飛び降りなさい」とか、「諦めたら手放したら大変なことになると思っていることをむやみやたらに諦めなさい」とか、「とりあえず、信じてみ」なんていう一か八かの賭けやギャンブルのようなものではありません。

十分信じるに値するものを、十分に神様が先に示し、提示し、施した後に、「信じなさい」と仰るんです。

イスラエルの民たちが、神様がお与えになると約束してくださったカナンの地に偵察に行った時、「そこに住むアナク人たちは、自分たちがちっぽけなバツタに思えるほどに背が高く、体が大きくて、戦ったところで勝算なんかない！」と大声をあげ、泣き叫びながら夜を明かし、落胆し、絶望しました。

私たちが進む道には、彼らイスラエル民族と同じように、落胆と困難と苦痛が実際にすぐそこにあります。こういう道を、私たちは何を根拠にして進むことが出来ますか？

先ほども言いましたように、「とりあえず信じて、飛び込んでみ！」ではありません。

「後ろを振り返ってみなさい！」です。

出エジプトは後ろ・過去にあり、約束した乳と蜜の流れる地は前にあります。今の私たちを彷彿させませんか？

十字架と罪からの救いは後ろ・過去にあり、永遠の希望に満ちた御国は前にあります。

モーセがイスラエルの民たちに語り掛けます。

「あなたがたがエジプトを出てくる時、どのようにして出て来たのか？

あなたがたがエジプトの王ファラオを始末し、エジプトの戦車や騎兵を片付けて出て来たのか？

主なる神様が、彼らに災いを下し、彼らの長子を打ち、紅海を割って渡って来たのではないのか？

雲の柱、火の柱をもって導き、マナをもって養い、岩を打って水を出して下さったのではないのか？

あなたがたを誰が守ったのか？

あなたがたの行く道を誰が妨げることが出来たか？

過ぎた日々を思い返してみなさい！」

これが、私たちの信仰の根拠です。

## Part Five

神様がもうすでに私たちの内に成し遂げて下さったこと、なされたこと、信じる者に働く神の大能の力による優れた力がどれほどに偉大なものであるのかを思い返してみてください。（間を取る）

私たち一人一人のここまでの歩みを振り返った時、実に、神様が大きなことを成して下さったという事実を容易に思い出すことが出来ますよね？（間を取る）

それが、私たちのこれからの日々を戦い抜く力となります。

なのに私たち人間は、実に変な生き物です。

すでに頂いたものはぼんやりし、すでに手の内にあるものは価値のないものとみなしてしまいがちです。

イスラエルの民たちのように、目の前にあることを解決して下さることを

もってでしか、信じようとしません。

過去の出来事がどんなに驚くばかりの恵みであったとしても、それは何の役にも立たないものとなり、「今あることを解決さえしていただければ、二心持たずにまっしぐらにあなたのことを信じますから」というのが私たち人間です。

神の大能の力による優れた力、恵みによって、ここまで生かされることが出来たのに、「今回、1回だけお願いします！」と、また要求します。

信仰に立つとは、結局のところ、神様がもうすでに私たちに成して下さった事をもって、どれだけ堂々と大胆に、神様側に立つことが出来るのかということです。

### Conclusion

イエス・キリストとその十字架の贖いを、私たちは知っているだけでなく、信じられています。

これよりも大きなことはありません。

主イエス様が私たちのために鞭打たれ、私たちのために茨の冠をかぶり、私たちの代わりに血を流され、死なれました。

そして、復活され、神の右の座に着いておられます。

今も、私たちのために祈っていてくださり、何を祈っていいのかも分からない私たちのために、私たちの内で私たちのために、聖霊なる神様が呻きをもって祈っていてくださいます。

これよりも確かな神様のご介入と、私たちが私たちである確実な導きがどこにあるでしょうか。

このことが揺らいでしまうというのは、詰まるところ、意地を張って、駄々をこねて、言い張っているだけのことであって、神様を試し試みていることです。

「神様、今回このことをして下さらなければ、神様、あなたはいないんですよ？」

驚いた神様が、「ううん、わたしはいる！」というようなことをしてまで、何を私たちはしたいのでしょうか？

神様を試みるのは辞めましょう。

もうすでに私たちが、知っていて、経験していて、持っている物を大いに用いていきましょう。

そして、感謝しながら、発揮していきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 1 : 19